福井の幕末明治 歴史秘話 26

春嶽が寵愛した三国湊の彫刻家、島雪斎

幕末期、北前船の交易により、福井藩唯一の外港として栄えた三国湊。その繁栄に支えられた工芸の一つに三国木彫があります。島雪斎は、この三国木彫の志摩派の祖、志摩乗時の高弟で師からは、〝我れ門人多しといえども彼に及ぶものなし〟と言わせるほどの腕前でした。その作品は彫出の写実性に優れ、彫刻の本質として欠くことの出来ない立体的な物の捉え方が秀逸だったといわれています。

雪斎は、その高い技術力から御用職人に取り立てられ、福井藩主、松平春嶽が京都へ上洛した際には、雪斎作の紫壇の書棚が朝廷に献上され、法橋の官（僧侶に準じて与えられる称号）を賜ったことでも知られています。

雪斎の傑作の一つ、「木造神馬像」は、今も三國神社（坂井市）の神馬堂に収められており、その像には、こんなエピソードが残っています。明治元（１８６８）年、雪斎は三国湊に外国産馬が船で入港したことを知り、毎日通いつめて神馬像を制作していました。ある日、三国まで来た春嶽が、雪斎の邸宅の前を通り、「このような大きなものを一人で刻むのか」と声をかけたといいます。この時、春嶽の馬が三度いななきました。春嶽は、像が生き馬のようであったことから、わが馬に「おまえの連れの馬か」と言い、引きあげていったといわれています。

明治６（１８７３）年、雪斎は春嶽の像を制作しました。現在、木立神社（坂井市）に祀られている春嶽の像には、春嶽の領民への愛惜の情をうかがい知ることができるエピソードが残っています。像は春嶽に奉上されたのち、有志の願いで、太刀一振とともに桜谷神社（現在の三國神社）に贈られました。春嶽は、この像に添えられた立願文に〝自分が福井を治めていた時は、とかく領民を苦労させた。自分の死後は魂だけでも越前へ帰り、領民の幸せをしっかり守りたい〟と記しました。この立願文は、春嶽の治世を今に伝えています。

三國神社木造神馬像

島雪斎をはじめ志摩派彫刻師の幕末の活躍。その足跡は、三國神社に残る彼らの作品や北陸三大祭に数えられる三国祭の山車などに施された美しい彫刻に見ることができます。春嶽が寵愛した雪斎の魂と三国木彫の歴史は、今も三国に生きづいているのです。

関連史料・ゆかりの地

三國神社

大山昨命と継体天皇をお祀りしている三國神社。重厚な随神門や拝殿の鳳凰、桐花、実物大の神馬像など、島雪斎をはじめとする志摩派の見事な彫刻が見られます。

【住所】坂井市三国町山王６丁目２－８０（えちぜん鉄道三国神社駅より徒歩 10 分）

参考資料等　内山健太郎『東尋坊と三国』三国町、福井市立郷土歴史博物館編『三国木彫を支えた人々 島雪斎図録』

発行／福井県観光営業部ブランド営業課